

「海を越えて ～海外への視線～」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

1 ロシア船の来航と米沢藩

長尾権四郎宛大石左膳書状（寛政5年3月20日作カ。大石家文書435）

寛政5年（1793）の書状と考えられる。大石は当時の藩主・上杉治広の小姓頭、長尾は侍頭。沿岸や島に外国人が上陸した際、村民に木の棒でも持たせて追い払う位しか指示できない、と困惑の状況を知らせる。

本状は長尾に届けられた後、長尾のコメントが付されて返送されたものである。コメントの内容は自身の体調不良に言及しているもので、切迫した様子はいかたがえな

備中宛書状（寛政5年3月23日作カ。大石家文書436）

前出文書と同時期の書状の控えとみえる。備中こと竹俣兵庫は当時江戸奉行職。作は大石左膳らか。粟島への上陸の可能性につき心許無く、備えの手立てが難しいとする。沿岸に立札を置く計画があったようだ。

海浜御備仰出さるに付覚書（寛政9年11月朔日。大石家文書220）

幕府から沿岸領地の警備について問い合わせを受けた後、藩内に出された通達の覚え。想定できない程の費用が掛かる恐れがあり、向こう三ヶ年間、衣食住や冠婚葬祭について厳重な儉約を命じる。

2 会津藩の北方派遣と米沢藩

会津様衆蝦夷御出勢近々出立之由風聞写（文化5年1月7日。大石家文書410）

綱木の庄屋・中川久四郎からの風聞とする。文化5年（1808）早春に会津藩が蝦夷地警衛のため米沢藩領内を通行するらしいとの情報と、蝦夷地に向かう主な会津藩士の名前等を記す。

風聞書の末尾には、正月下旬より出立するらしいと記すが、実際に会津藩が出発したのは1月9日。この風聞書が作成された二日後である。会津藩の正確な事情は米沢では把握しきれていなかったようだ。

（会津藩船遭難につき口上控）（文化5年8月19日。大石家文書225）

米沢へ赴いた会津藩の使者口上等を記す。蝦夷地警衛を終えカラフトから新潟港へ向かった会津藩の船が暴風雨に遭い遭難、行方不明となったので万一米沢領内に漂着した際の

取計いを頼む内容。

『会津若松市史』によると、遭難した会津藩の船のうち一隻は利尻島の海岸で岩に衝突し大破、本資料内では行方不明とされた五隻は各地に漂着しながらも 9 月中には会津への帰国を果たしたという。

資料内では会津藩使者に対し、蝦夷地警衛の役目が済んだことにつき「御静謐ニ相成り一段也」と労いの意を伝えたところ、「イヤ、御安気も相成間敷」と返されている。会津の使者の目には、米沢藩側の対応は当事者意識が希薄な、呑気なものと写ったのかもしれない。続けて、来年もどこかの警備を命じられるかもしれないと会津の使者に言われたと記す。来年の行先はカラフトか松前函館かも知れないと言われ、資料の作者大石は「気味悪き事」と結んでいる。

御使番御使者手扣（文化5年9月9日。岩瀬家文書145）

蝦夷地警衛から帰国の途にあった会津藩勢が米沢領内に止宿した際の、米沢藩使者による挨拶の控書。容易ならざる御働きは辛労の至りのところ、米沢へ止宿されたことは一段の事と、その労をねぎらっている。末尾に、8月から9月にかけて米沢を通行した事が記されている。

唐太嶋帰帆記（鶴城叢書巻之八十六より）

文化3年（1806）、ロシア船に捕らえられ利尻島沖で解放されたカラフト漁場番人らの箱館奉行所にあてた陳述書。ロシアは文化3・4年にカラフト・エトロフを襲い、日本人を拉致するなどした。この事件が会津藩等の北方派遣や、ひいては後のゴロヴニン事件へつながっていく。

本書は昭和初期に米沢所縁の史料を収録した「鶴城叢書」に掲載されている。末尾に、文化5年にカラフトから帰国の途にあった会津藩勢が米沢を通行した際、馬場図書という人物から宿人が借り受けた冊子である、と記す。会津若松市立会津図書館所蔵「諸士系譜巻40は之部8」に掲載されている馬場図書重信の履歴の一つとして文化5年の蝦夷地警衛が記されていることから、前述の一文も一定の信ぴょう性を有しているといえるだろう。（この資料はインターネット上の「会津若松市デジタルアーカイブ」よりご覧になれます）

本書にはカラフト漁場番人の富五郎らが拉致されてからの動向が記されているが、その中には、カムチャッカ周辺に暮らすロシア人の様子も描かれている。現地の食事は豆や麦類を「牛の油」に浸して食す、などとある。記述の内容から、富五郎らは監視下にあったものの、心身の健康のために外出を勧められる程度の自由は与えられていたことがうかがえる。（逃げようが無い、という理由も当然はたらいていただろうが）

富五郎らは、何故自分たちが捕らえられたのかをカムチャッカの代官に尋ねた、とある。その応えとして、一昨年長崎を訪ね交易の樹立を願い出たが断られた事への報復として、力の及ぶ限り日本を焼き払うようにロシア国王から命じられたため、盗賊まがいの行動を

とったことは不本意であり、二国間の交易が整った際には損害額をロシア国王から支払うようにしたい、とする。この代官はロシアの使節として長崎を訪れた経験があると話し、富五郎らに日本人に需要がある産物は何があるかと尋ねたりしている。代官の名は「バヒヨウイワノミエチ」と記されている。長崎へ使者として訪れたロシア人といえばレザノフが想起されるが、この人物はカムチャツカ州長官陸軍少将のコシェレフと考えられる。

結果として、ロシア船によるカラフト・エトロフ島襲撃事件は、レザノフの部下・フヴォストフが自己の意志で引き起こした事件だったとして日露間で幕引きが図られている。

嘉永6年(1853)幕命によりまとめられた対外関連の事例集である「通航一覽」にも本書と同内容の陳述書が掲載されている。また、これも同内容の「唐太嶋エトロフ島番人等申口」が北海道大学北方資料データベースにて画像公開されている。本書のような対外情報に関する文章は書き写され、日本国内で広く流布していたものと考えられる。

全体を通して陳述の内容は詳細で、特に解放直前の文化4年のフヴォストフらによるエトロフ島襲撃の経過については、富五郎らもロシア船に同乗していたこともあり、多くの文量がさかれている。また同時に、拉致や襲撃の実行者であるロシア軍人達と徐々に交流を深めていく様子やロシアから幕府に送る予定の書翰の書式について助言を行うなど、富五郎らにとって相当に不利益な内容も多く含まれており、本書が本当に函館奉行所に提出されたものなのか、疑問の念を拭いきれない面もある。だが、全く荒唐無稽な内容ではなく、実際に当時のカムチャツカ方面に出向いた者でなければ知り得ないと思われる内容も多い。

南部津軽松前 浜通絵図 (文化5年。岩瀬家文書 698)

藩絵図方・岩瀬三左衛門の作。岩瀬は文化4年には酒田、5年には函館に派遣され、現地を調査したという。本図には津軽海峡の潮の流れや、港間の距離、主要な施設などが描かれている。

前出大石家文書では、海防に対して米沢藩士の当事者意識がやや薄いようにも見受けられたが、藩としては岩瀬に本図の作成を命じるなど、一定の危機意識のようなものを持っていたことがうかがえる。

3 ペリー来航前夜の米沢藩 ～栗島への出兵騒動～

此度異国船打払被仰出候ニ付而之評 (文政年間以降か。大石家文書 187)

文政8年(1825)幕府から異国船打払令が出された後、藩内での検討過程を記したものと見える。領地の内、栗島は周囲の海が深く、外国人が上陸する恐れが高いとし、島民と異国人の交流を禁ずる立札の設置を検討している。

本資料では、当時の栗島の島民の生活に関する米沢藩側の見解も見える。島内では金銭が通用しておらず人々は釣った魚を庄屋へ差し出して日用品と替えているようだ、山を三分割して馬の放牧地と畑作地を年々交換しているようだ、等とする。初めて岩船郡が米沢藩の

預所となつてから半世紀は優に過ぎているこの時点において、米沢藩側では粟島の実情を把握しきれていないようにも見受けられる。

庄内飛島沖異国船漂泊の件（嘉永元年5月1日。大滝家文書85）

嘉永元年（1848）4月、庄内藩領の飛島沖に異国船が現れた際の様子を、酒田港へ出役中の米沢藩士吉見熊次が報告する。警備に配された庄内藩士達は「拳を振り片唾（かたず）を呑んで」と緊迫の様子を伝える。

新庄からも加勢の使者が到来したとする。その後、異国船とみられる船は庄内藩側と遭遇すること無く姿を消したようだ。米沢藩が預所の越後岩船の沖合に異国船が現れたとの報に接するのはこの直後の5月2日のことであり、当時の情勢の一端を伺い知ることができる。

（越後預所異国船出現につき派遣藩士の氏名）（嘉永元年5月10日。吉田家文書137）

5月9日、越後岩船郡への出張を命じられた米沢藩士63名の名前を記す。すでに7日には20名ほどが越後表へ派遣されていたが、9日に先遣の代官藤田甚助から本隊出征の見合わせが進言された。

妄言 越後海浜騒動之件（嘉永元年6月5日。吉田家文書141）

中止に終わった越後表派兵につき無名老耄こと米沢藩士・吉田綱富が所感を記したもの。近年比類の無い騒動であったとし、明日をも計り難い今後の備えとして藩を挙げて三ヶ年の儉約に励むべきと記す。

作者の吉田綱富は当時数え93歳。今回は自らが派遣された享和元年（1801）の村山一揆以上の騒動である、とする。老人共の話しに聞いた寛永年間の会津騒動以来の騒動だ、ともする。表紙などに「他言無用」と記しつつ、高野という人物に届けた様に記されている。藩内のどの範囲にまで回覧されたものだろうか。本書の他に伝来する諸資料からも、老いてなお健筆ぶりを発揮する綱富の姿をうかがうことができる。

御番頭中江御相談心扣（嘉永元年9月。渡部家文書17）

藩の宰配頭・登坂作左衛門から番頭中へ相談されたもの、とする。先日の派兵中止につき、昨今薄れている質素貯銭の古風を取り戻し、軍備の費用に充てるべきだと唱える。

この中で、陣笠・陣羽織・小袴などの軍装について、粗相があっても「聊苦かる間敷」としつつも、「身分丈の軍装無之候ては可恥之儀」としている。各々の軍装を調えるためにも儉約の必要性を訴えている。

御預所海浜見分諸事留帳（嘉永2年11月。岩瀬家文書116）

嘉永2年（1849）、幕府から沿岸領地の絵図面の提出を求められると、米沢藩は絵図役の

岩瀬らに越後表出張を命じた。本資料は岩瀬らによる越後出張の記録綴。各地の海岸の水深等も絵図に反映させるよう命じられていたこと等がうかがえる。

岩瀬らによる調査は冬季の悪天候により思うように捗らず、翌嘉永3年4月に再度出張し粟島等を調査したことがわかる。日記からは、道中地元住民らによる熱烈な接待を度々受けていたことがうかがわれる。ある日の昼餉に訪れた脇川では90前後の老婆から盃を求められ思わず長居すると、宿とした寒川では庄屋市助らによって未明にわたる酒席が用意されていた。翌朝、「急の御用」であると出発を急ぐも、今度は市助の女房も参加する酒席が昼まで続いた。身分の垣根を越えてしっかり歓待を受ける岩瀬らの姿に当時の社会の一端を伺える。

御尋ニ付書上帳（嘉永2年11月。岩瀬家文書117）

沿岸絵図の作成に際し、岩船郡の各村から提出された調査書の綴り。家の軒数や人口、隣村や主要施設までの距離や、海岸の水深を報告する。これらを基に絵図が作成された。

（粟島絵図）（岩瀬家文書432）

嘉永3年の粟島視察後、岩瀬の作と考えられる絵図。西岸を中心に沿岸の巨岩を詳細に描いている。また東岸の前浜には船団が描かれ、船の停泊が可能であることが分かる。

越後国岩船郡海岸絵図（嘉永2年か。岩瀬家文書429）

岩船郡へ出向いた岩瀬が現地で描いたスケッチ帳と思われる。笹川や柏尾など、沿岸の集落と海岸の様子が描かれている。これらのスケッチを元に絵図が作成されたと考えられる。

岩瀬郡海岸絵図（岩瀬家文書436）

米沢藩預所の岩船郡の沿岸と粟島を描く。村ごとに海の深さが記されている点から、海岸警備のために嘉永3年以降に作成されたものと推定できる。幕府の命を受けて米沢藩が作成した絵図である。

4 海外の情報を求める米沢藩士たち

夷情問答（木村家文書121）

米沢藩士・木村家に伝来。同書は嘉永年間に長崎奉行とロシア使節プチャーチンとの間で開かれた日露国境をめぐる交渉における日本の主張を記し、続けて嘉永6年(1853)10月、長崎奉行とオランダ商館長の間問答の概要を記す。同年6月のペリー来航を受けて米国をはじめとする外国は何を日本に望んでいるのか等をオランダ商館長に問うている。

また、これに先立ちオランダから日本へ今後外国と通商条約を締結する際の私案が提出されており、この内容についても問答が行われたことがわかる。この私案はシーボルトの手

によるものである。

サントウイス・サンフランシスコより来状写（安政7年2月。水野家文書59-2）

米沢藩で医師を勤めた水野家に伝来。安政7年（1860）、幕府からアメリカに派遣された使節の一人・塩沢彦次郎が寄港先のハワイ・オアフ島から妻へ宛てた手紙の写。ハワイの人々の衣食住の様子などを絵を交えて伝える。表題のサントウイスはオアフ島のセントルイスを指すものと考えられる。

この手紙の中で差出人の彦次郎は、「忙しくて複数の宛先に手紙を書くことが出来ないので、この手紙を各所に披露して欲しい」と妻に伝えている。それ故、この書状は米沢まで伝来したのかもしれない。余談ではあるが本資料は当時の風聞書などを収載しており、同年3月に起こった桜田門外の変の際に読まれた落首などが記されている。

使節はこの後、アメリカ・ワシントンでブキャナン大統領と面会し、安政5年に結ばれた日米修好通商条約の批准書を渡した。喜望峰を經由して9月に帰国。この時、安政7年から万延元年に改元されていた。

漂流人話聞書（水野家文書117）

安政5年（1858）、鹿島灘で遭難し約一か月後フィリピンに漂着した赤穂の光塩丸船員の見聞録。漂着先のフィリピンの人々は日本人の「大に憐深く」非常に丁寧に対応してくれた、とある。

アメリカ国ヨリ帰国人御答之下書（嘉永7年。地域史料KI006）

米沢藩預所・越後岩船郡の勇之助の供述書。嘉永5年（1852）、勇之助らが乗る船はエトロフ島などでマスを積み込んだ後、新潟港へ向かっていた所、出羽沖で遭難。9か月間漂流し、積荷のマスや雨水で飢えや渴きを凌いでいたが、勇之助を除く乗組員12名は次々に死亡した。勇之助も半死半生の身となっていた所、偶然アメリカ船に救助され、その後アメリカ・サンフランシスコに11か月程滞在した。

本書には米国滞在中に見聞きした事柄も綴られ、衣食住を含めたサンフランシスコの繁華な様子が記されている。サンフランシスコには、勇之助の前に漂流の末に救助された播磨出身の浜田彦蔵が居り、勇之助の通訳を引き受けたりしたが、本書には彦蔵に会った事は記されていない。余計な事を言って藩からの取り調べが厳しくなることを避けたのだろう。

この供述書は時の米沢藩主・斉憲の目にも触れたようで、同様の文章が「上杉家御年譜」の安政元年8月18日条に見える。嘉永7年、アメリカ船によって送還された勇之助は、日本が開国した後初めて帰国した漂流者とされている。

（本資料はインターネット上の当館デジタルライブラリーから全文をご覧ください）

越後表出役ニ付日記（安政6年8月。渡部家文書63）

安政6年（1859）、献上品の魚類の調達を命じられた藩台所頭・渡部良蔵の日記。越後岩船へ向かう渡部に対し、越後表で異国船について異変があれば報告するように藩から命じられたことが分かる。

ペリー来航から6年が経ったこの時点では、買物途中の藩士が片手間に報告する程度で事足りる程に、異国船への脅威の念は薄まっていたものとうかがえる。

5 北海道の開拓と米沢藩

蝦夷恵首谷日誌（明治3年。高橋家文書7）

米沢藩士・浜崎八百寿による北海道の見聞録。景観や風俗、日々の出来事などを記す。明治2年、米沢藩は北海道磯谷郡（現寿都町）の支配を命じられた。同年9月、藩より調査を命じられた浜崎ら7名の藩士は10月にロシア船に乗り横浜港を発し、翌3年3月まで北海道に滞在し調査を行った。期間中には、札幌方面まで足を延ばして調査をおこなっている。しかしながら、明治4年、政策の転換により米沢藩の磯谷郡支配地は開拓使へ返還され、米沢藩の開拓事業は終了した。

浜崎は後に木鱗（ぼくりん）と号し、米沢高女や九里裁縫女学校で絵画や華道を指導した。木鱗の号は、前段の北海道調査中に小樽の浜辺で麒麟の姿に似た木片を見つけて持ち帰ったことに由来するという。

（本資料はインターネット上の当館デジタルライブラリーから全文をご覧ください）

（磯谷郡周辺絵図）（明治2年以降。岩瀬家文書708）

藩絵図方・岩瀬家伝来。米沢藩が一時支配した磯谷郡を中心に描く。遠くに羊蹄山や昆併山（昆布岳）もみえる。海岸に近い場所に米沢藩の本陣があったことがうかがえる。

尻別川を挟んだ絵図左端に「五島銑之丞支配地」とあることから、旧旗本の五島に磯谷郡の一部支配が任じられた明治2年以降の作とわかる。

（写真）磯谷郡の内御支配地之図（明治2年以降。岩瀬家文書437）

明治に入り米沢藩が一時支配した磯谷郡沿岸の鳥瞰図。集落と岩礁を主に描く。絵図内に「米沢藩支配」とあることから明治2年から4年までの作と分かる。岩瀬家に伝来したが作者は定かではない。

6 海を越えた人々 海を越えた交流

在伯山形県人「移住六十二年」（1970年。郷土資料K334/ザ）

在ブラジル山形県人会の記念誌。この内、ウライ市の生みの親として米沢出身の渡辺万次

郎が紹介されている。渡辺は昭和 11 年より海外興業会社の支配人として日本人入植者を率いて開発を進め、後にウライ名誉市民権が贈られた。

余談ではあるが、今日のウライ市に「Praça Manjiro Watanabe (渡辺万次郎公園)」と名付けられた一周 180m ほどの公園が設けられている。写真などはインターネットを検索すると見つけられるので、気になる方はお調べいただきたい。

話しは戻り、本書の中で気になる記述がある。山形県人のブラジル移民の草分けと呼ばれた、亀井田村（現在の太石田町）出身の鈴木貞次郎の回想によると、1907 年に鈴木がブラジルに降り立つ以前に、既に米沢周辺の出身らしい遠藤直吉という人物がブラジルに移り住んでいたというのだ。日露戦争後にブラジルに入ったという軍人上りの遠藤は駄菓子売りや皿洗いをしていたというが、鉄道工事に従事していた際に死亡したという。遠藤の正確な出身地や経歴を知る人や術は無く、本書では「ナゾの人」「山形県移民史上残念なこと」であるとしている。

米沢市の姉妹都市（平成 11 年 7 月。郷土資料 K318/ヨ）

米沢市の姉妹都市の概要を記す。初めての姉妹都市としてブラジル・タウバテ市が紹介されている。米沢の電機製作所がタウバテ市に進出したのを機に昭和 49 年に締結された。

（写真）米沢新聞（昭和 49 年 1 月 29 日）

タウバテ市との姉妹都市が結ばれた翌日の米沢新聞。日本・ブラジル両国の国旗が掲げられた米沢市役所前の写真や調印式の様子、吉池市長からタウバテ市に贈られたメッセージなどが掲載されている。

（写真）調印式の様子など

昭和 49 年（1974）1 月 28 日、ブラジル・タウバテ市でおこなわれた姉妹都市提携調印式を撮影したもの。調印式には佐藤助役と本間市議会議長が出席。米沢からは笹野一刀彫りや児童の絵画などが贈られた。

このほど、姉妹都市提携から 50 周年を迎えたことになる。